

---

# 猟奇殺人鬼の変奏曲

三月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猟奇殺人鬼の変奏曲

### 【Nコード】

N5434D

### 【作者名】

三月

### 【あらすじ】

本編「猟奇殺人鬼の交響曲」が、知らない間にシリアス調になってしまったので、別個にコメディパートを設立・爆発させることに致しました。若干頭の悪さが上がっておりますが、本編とのリンクもございます。よろしければ、どうぞ！！

## はじめに

### 【本編のあらすじ】

修道士見習いのキオ・コッローディ少年のもとに、ある夜、女神が現れました。

それは、彼が信仰しているカロード教の青の女神様でした。

女神は「ある人間たちを導きなさい」と、キオに啓示を与えます。

ところが、彼の導く相手とは、世界に悪名を轟かせる6人の「猟奇殺人鬼」だったのです。

聖書の1ページから、彼らを導く手立てを考え出したキオ少年は、啓示の命令をまっとうするべく、猟奇殺人鬼と共同生活することになりました。

詳しくは「猟奇殺人鬼の交響曲」をどうぞ。

### 【変奏曲用キャラクター紹介】

キオ・コッローディ（実年齢15歳）

心優しく、正直な、修道士見習いの少年。  
茶髪に鶯色の目、ソバカスと尖った鼻が特徴。  
いまや猟奇殺人鬼たちのマスコットの存在。  
本編より若干ツツコミが激しい。

ジル・ヴィクトール・フランスワ・ド・ブルノー（目測年齢27、  
8歳）

変態その1。

金髪碧眼の美丈夫だけど、黒髪女性の飼い殺しが趣味。

ナルシストにして自意識過剰、高慢な、性的にフリーダムすぎる変態貴族。

本編よりアホ。

アイリーン・ネルソン（目測年齢24、5歳）

変態その2。

褐色の肌に灰髪の美女だけど、食人鬼。

露出癖あり、支配欲強し、女王様気質。

本編よりマトモ。

ペーズリー・ハワード・ゲイン（目測年齢10代後半）

変態その3。

人見知りが激しすぎるのか、死体愛好者。

本物の猫耳が付いた皮袋を頭に被っており、上等の革長靴をはいている。

ぼさぼさの黒髪に緑眼。（唯一見える部分）

本編より挙動不審。

リジー・ドット（目測年齢14、5歳）

変態その4。

金茶の髪にパツチリ赤眼の、カワイイ加虐的愛好者。

被害者の悲鳴や命乞いが大好き。

大きな鎌の入ったトランクと、赤いフードが特徴。

本編よりサディスト。

ディーン・クレンペラー（目測年齢20代前半）

変態その5。

いつでもどこでも空気を読まないハッピー野郎。

ツバ広の帽子に、羽飾りだらけの全身タイツを着た、人さらい。

ラトウールの街から130人の子供をさらった伝説持ち。

本編よりお子様。

グラン・ジンジャー・ボーデン（目測年齢不明）

もう人間かどうか怪しい、無差別殺人鬼な不死身の男。  
全身包帯に覆われており、ぼろぼろの衣服を身につけ、大銃を所持している。

常に無言だが、読み書きはキオに教えてもらった。

変態ではない。

本編より弄られ役。

## J・A・ジエボーダン

北方機動憲兵隊の大佐にして、憲兵隊のアイドル。

銀髪に青みがかかった銀の瞳の40代だと思われるがちな30代男性。  
長身、鍛え上げられた体躯、傷跡のある強面。だけど、アイドル。  
憲兵隊内のアンケート調査で3年連続「抱かれない男ナンバー1」  
だが、憲兵隊の8割は男性という複雑な現実に直面している。

## スコール・ソリュエラ

北方機動憲兵隊精鋭部隊「ブレイメン」のひとりで、准尉。

赤頭にハシバミ色の瞳のジエボーダン大好き青年。

大食いなため、人のおかずをよくかつさう。（被害者は大抵フェンリル）

常にハイテンションで、バカを装っているかと思えば、結構鋭い一面も。

でも、やっぱりバカ。

レト・カルターニャ

同上のひとりで、少尉。

黄土色の髪と瞳をもつ、ジエボードン大好き女性。

大佐の生パンツは安眠グッズだと称する、自覚のない変態。

ただし、他の男性憲兵隊員にはものすごく厳しく、視界に入っただけで舌打ちされる者もいる。

料理が壊滅的に下手。

フェンリル・バローウ

同上のひとり。

黒髪、紺の瞳、長身の美形男性。

低血圧にして注意力散漫なため、常に額をどこかにぶつけている。

コミュニケーション能力が低めで、ペットボトルについたフィギアや、抽選で小物をくれたりするキャンペーンシールを集めるのが好きな、引きこもり野郎。

マーナガラム

同上のひとり。

タテガミのような金髪と一重の目が特徴のヤンキー風青年。

ピアスやら、目元の縫合後やらが、いかにも不良っぽいのが、わりと

常識人。

なにかと血の気が多く、斜に構える部分があるが、やっぱり常識人。大佐に次ぐ苦勞人な、どこまでも常識人の域を出ないツツコミ要員。

ハティ・ノードヴェント

機動憲兵隊東支部の中尉。

緑の瞳と銀縁眼鏡の爽やかな天然好青年。

個性的な憲兵隊員のなかで、仲裁役として地味に活躍。

スコッチと並び、「二大双壁」として名高いらしいが、詳細は不明である。

ガーデニングが好きだが、育てた花が一度も咲いたことがないという悲しい過去を持つ。

随時追加予定。

## 第1楽章 ピヨの逆襲

ギルシアンブリジット（国）

ラチュアドール（県）バートン（郡） ルベルコンティ

10月20日（月）

10月18日の記念すべき夜。

女神様から啓示を頂いたキオ少年は、そのとおり、殺人鬼の導き手を引き受けることになった。自分以外の全員が猟奇殺人鬼だというのは、さすがに不安だが、聖典で導き方も分かったため、わりと気楽なキオである。

猟奇殺人鬼のひとりである、ジルのお屋敷に、（キオも含め）7人全員住むことになってしまったが、元来庶民生まれのキオには、彼の広すぎるお屋敷が落ち着かなくてしょうがない。

そういうわけで、キオは、屋敷の探検も兼ね、長い廊下を一人歩いているのである。

さて、ある部屋を通り過ぎた時、なにやら、ひそひそ話し声が聞こえてきた。この屋敷に今いるのは、キオと猟奇殺人鬼だけのはずだ。

ひょっとして、猟奇殺人鬼の皆さんが、僕の殺害方法とか死体遺棄方法とか話してるんじゃない……心配になったキオは、声が聞こえると

思しき部屋の扉に、耳をくつつけた。

盗み聞きなんて関心しないでしょうけど、見逃してください、女神様。

「というわけだけど、どーすんの」

「すごいハシヨリ方するね、アイリーン」

アイリーン、てことは、灰髪の食人鬼さんか。話してる相手は、快樂殺人鬼の代表リジー・ドットみたいだ。

「あの修道士、どう思う？」

うわ、いきなり核心をつく質問だなあ……。

「小さいと思う」

まあ、小さいけどさ……僕の印象って、その程度なのかな。

「可愛いと思う」

なんだろう……イヤというか、危ない感じがするなあ。ジル・ヴィクトール……なんとかさんに、ああ言われると。なんで、こんなに名前長いんだろ。

「オイラ、分かった！」

手をポン！と打つ音。この声は　ディーン・クレンペラーだな。

「茶色いと思うー！」

なんだ、その感想！？もう、人間に対しての感想じゃないじゃん！  
あ、髪の色のこと！？

「ああ、確かに茶色いな」

「うん、茶色い」

茶色さは、どうでもいいよ！もっともらしい同意すんな！

「そついえば、名前なんだっけ、あの修道士」

「えー……テイ……ミロだっけ」

「え、そんなんだっけ？そんな舌を巻く発音、入ってたっけ」

キオですよ！つい昨日、自己紹介したじゃないですか！というか、  
もう2日目なんで覚えて欲しいんですけど。

「なんか、こつ……ペロ？」

犬！？

「それ、違う。もっと、こつ……ペスとか」

だんだん離れていってる！誰でもいいから思い出せ！

「待った、待った、出てきそう……もう、この辺まで出てきてるんだがな」

頑張っ て思い出して ください、ジル！変態貴族 っ て思ったこと、訂  
正 しますから！

それ、思い出せ！キーオ！キーオ！

「わかった、ポロだ！」

この変態貴族 ううううううう！！思い出して その程度か！

「あ、近い！それ近いよ！」

近くねえよ！かすってすらいないよ！

「でも、ポロじゃなかった気がするわ……そもそも、パ行じゃなか  
った ような」

ナイス、アイリーン！そのまま軌道修正 してください！

「じゃあ、ピヨで」

じゃあ、ってなんだよ！パ行じゃないって 言ってるのに、何故なお  
も執拗に半濁音を入れようとしてくるんだよ、変態貴族！

「あーうんうん、ピヨっばいー！」

「言われてみれば、ピヨっばい」

な、なにそれ、満場一致でピヨっばいの！？嬉しくないイメージが  
固定しちゃう だろうが！

「ピヨでいいか、もう」

「キオ」

「そうね、思い出せないし」

「よかった、解決して！」

え！？今、答え言ってる人いたじゃん！カタコトの……ペーズリー・  
ハワード・ゲインだ！

「それで、善行をしないといけないわけだよな」

あああ、スルーされた！名前ピヨじゃないんだけど、もういいや！

「いいことなんかしたくないけど……そうしないと、女神の呪いが  
とけないんですよ？心臓が鉛になって死ぬなんて、そんな屈辱的な  
死に方、絶対やだ」

さっき、リジーが言ったように、6人の猟奇殺人鬼たちは、青の女  
神様によって「善行を積まないと心臓が鉛になる」という陰険な呪  
いをかけられている。それを、キオが、サポートしなければならな  
いわけだ。

「今まで、イイコトしたことある？」

「悪いことなら、数限りなくあるんだけどね」

でしようね、殺人鬼だもんね。

「自販機の釣り銭出てくるところにガムとか」

「ジテンシャ ドミノ タオシ トカ」

「市民プールで放尿とか」

「マーケットのミンチを揉みまくるとか」

「列車内で、女子高生を終日なめるように観察とか」

スケール小せえええええ！でも、なんかかんか人の迷惑になることしてる！人間としてやっっちゃいけないことしてる！

よい子のみんなは絶対マネしないでね！

「やっぱ、なんでもコツコツ積み重ねていかないかね」

「そうよね、千の悪事も、まずは小さな一歩よ」

正しい！使い方は正しいけど、方向性を間違ってる！

大きな間違いに気付かず、なにやら、和やかに笑いあっている猟奇殺人鬼たち。

キオは、扉から耳を離し、立ち上がった。これ以上聞いてても、なんか無意味な気がしたからだ。

「明日から、大変なことになるだろうなあ……」

彼は、今作つてある祭壇を、更に増やしてやろうと決意した。

今夜の嫌がらせも、かねて。

## 第1楽章 イタズラの代償

10月22日(水)

昨日、20日夜の嫌がらせもかねて、たくさん祭壇を作った。

すると、祭壇画の青の女神様の絵、すべてに、ヒゲが書き加えられていた。

犯人を突き止めようと思う。

『キオの青春サヨウナラ日記』より

「はい、みなさん、集合

!!!」

キオは、女神の異変に、朝の礼拝で気付いていたが、集合をかけたのは昼過ぎにした。礼拝は朝5時なので、そんな時間帯にたたき起こすと、さすがに殺されると思ったからだ。

「誰がやったんですか、コレ！」

キオが、青の女神の絵を、びしつと突き出すと、誰ともなく笑いが広がった。

「笑っちゃダメ！」

それでも、笑い止まない。

「追加呪いを、かけられますよ！」

みんな、口元を引き結ぶ。

「いいんじゃない？なんか、面白いし」

「面白い祭壇なんて、祭壇じゃないです！それは、もう祭壇以外のなにかです！誰がやったんですか！」

教会からの借り物に、こんなことをされてはゼペット司祭様にも、青の女神様にも申し訳が立たない。キオの並々ならぬ様子に、みんな、なんとなく視線をそらす。

もちろん、名乗り出る者はいない。

「分かりました。じゃあ、みんな目をつぶってください」

キオの言葉を、不思議がりながら、猟奇殺人鬼たちは目を閉じる。

「みんなの前で名乗るのが恥ずかしいなら、僕にだけ教えてください。女神様にヒゲをつけた人は、黙ったまま手をあげてください」

さて、一体だれがやったのか。

そろそろと、ひとりの手が上がる。

……いや、それはない。

1番ない、と思っていた人物である。

グラン・ジンジャー・ボーデンが、女神様にヒゲを書き足した？

「それは、ないだろおおおおおー!!！」

キオの絶叫に、みんなが目を開く。

「おかしいですよ、これは作為的なものを感じますよ、僕は!!！」  
歩き回るキオに、声がかかる。

「ねえ、もう犯人分かったんでしょ？」

「部屋に帰っていきい？」

「イ〜イ？」

キオの直感が囁いた。

犯人は、こいつらだ……この3人だ、多分。

リジー・ドット。

ディーン・クレンペラー。

ペーズリー・ハワード・ゲイン。

3人は、へっへっへと、あくどい顔で笑っている。ペーズリーに聞  
しては顔が見えないが。

「……まだ、犯人が分かったわけじゃありません」

「なんで？だって、グランが」

「はい、そこおおおー！」

キオのものすごい反射神経に、ビクーン！とペーズリーが猫耳を立  
てた。

「なんで、目をつぶっていたのに、グランが手を上げたと知ってる  
んですか」

指されたリジーは、一瞬、しまった、というような表情をした。

「もちろん、僕は疑っているわけじゃありません。でも、グランがこんなことするとも思えません。むしろ、こういうしょーもないイタズラに一番反応しそうなリジーとティーン。そして、猫耳で疾やましさを表現したペースリーに話を聞きたいですね」

疑っていないと言いつつ、名指しのキオ。

3人は、当然、揃って潔白を訴え始めた。

「オイラじゃないです。グランです」

「そうそう、だって、グランがやれって言ったんだもん」

「グラン ダモン」

なんだ、この性質の悪い小学生みたいなのは……。

というか、リジー、自分がやったことは自供しちゃったよ。

「あのね、リジー。グランは、お話ししないでしょっ？どっやって命令されたんですか？」

キオに至近距離で詰め寄られ、リジーが目を泳がせる。

「……ね、念波で」

「……………」

「……………」

ディーンと、ペーズリーが、それは無理がある、と言いたそうな目をリジーに向ける。

「や、待った、念波ではないよ、うん。それはね、わたしもムリがあるなって分かってから。えーと……………手話で命令を……………手話できたっけ、お前」

リジーに問われ、グランはふるふると首を振った。

「……………筆談は？」

再び、ふるふると首をふるグラン。

「コミュニケーション方法ないのかよ！お前ができるのって、『はい』と『いいえ』だけ!？」

こくととグランが頷く。

「……………」

キオは、リジーが、どういう対応策をとるのか、静かに観察している。

ややあって、リジーがつぶやいた。

「……………キオ、じゃあ、念波で」

「今の会話聞いてたら、完全にリジーが犯人じゃないですかあああ

あ！！」

「くっそう！バレたか！」

「くっそう、じゃないですよ！なんなんですか、その小細工！いたずらだけならいざ知らず、嘘について、人に罪をなすりつけようとするなんて、言語道断！罰則です！」

「そんな、キオったら大胆……」

「なんで、ジルが嬉しそうな顔するんですか！？」

脊椎反射が下半身に通じているんだろうか、この人は。

アイリーンが、隣で汚物でも見るような顔をしている。

「リジーは、女神様のヒゲを落としておいてください！」

「でも、ディーンとペーズリーもやってたし！」

傍観者に回っていた、ディーンとペーズリーが、ぎくりと肩を揺らす。

さすが、赤ずきん。仲間を売るのが早い。

「リジー、人がやってたら、自分もやっていいんですか？じゃあ、リジーは、ディーンが車にひかれたら、一緒にひかれるんですか。ジルが全裸で踊ってたら、一緒になって踊るんですか。そんなことしないでしょっ？」

「え、なんで、私？」

キオは、ジルの問いを華麗に無視した。

「3人で仲良く、直してください」

高らかに宣告され、3人は文句を言いつつも、従う意思をみせた。

「でも、油性ペンで書いたから、落ちないよ？白い絵の具で隠したら、白ヒゲになるし」

「肌色の絵の具で隠せばいいじゃないですか」

「赤は？」

「それじゃ、鼻血になるでしょ！変なこだわりはいいですから、肌色でお願いします！」

絵の具なんて手元がないから、まず買いに行かなければならない。しかし、余計な出費を嫌うキオは、絵を直すかわりに、ホールの掃除を命じた。

「あーあ、グランのせいで」

デイーンの言葉に、無表情な大男が、なんとなく申し訳なさそうにする。

「人のせいにしてないの！」

リジーが、ひそかにグランを蹴っている。

「人を蹴らないの！罰則追加です！」

抗議の悲鳴を無視し、キオはディーンとリジーに、皿洗いを命じた。

ここは、まるで、保育園か小学校、あるいは動物園です。

ゼペット司祭様、僕は今日も頑張っています。

【本日のキオに対する好感度】

リジー +1 (怒られたけど、こいつ面白い)

ディーン +1 (怒られたけど、かまってもらえた！)

ペーズリー -1 (オコラレタ)

ジル +1 (むしろ、怒られたかった)

アイリーン -1 (しょうもないことで、いちいち呼び出さないで)

グラン +2 (なんか、かばってもらえた)



## 第1楽章 聖典授業

10月25日(土)

全員分の聖典を用意し、こっそり部屋に置いてみた。

残らず、歯形がついているのはなぜだろう。

『キオの青春サヨウナラ日記より』

「今日から、聖典を読んでもらいます。これは、心を豊かにするため読むのであって、別に皆さんを精神的に追い詰めようとか、そんな思惑はありません……だから、悲しい顔しないでください」

猟奇殺人鬼たちは、大嫌いな食べ物を目の前に置かれた、子供のような悲しい顔をしている。そんなに聖典がキライなんだ、と、キオは改めて生活の違いを感じた。

「聖典は、ちょっと……アタシ、聖典を読んだりすると、頭が痛くなるの」

アイリーンが、これ見よがしに溜息をつく、他の連中も意見し始めた。

「そーだねー、なんか具合悪くなっちゃっ」

「カラダ ダルダル」

「なんか、もうすでに熱っぽい！」

「カビが生える」

「なんか、最後のおかしくくないですか！？嫌いだからって、そんなワガママ言っちゃダメですよ。結構面白い話もありますからね。そんなに毛嫌いしないで」

「やんわりたしなめられ、みんな、まあ、しょうがないなという気になる。せつかく、一生懸命やってるんだから、付き合ってやること思い直したのだろう。」

「どこにしようかなあ……じゃあ、この『幸いを分け与える旅人』にしましょうか」

ひとりの旅人がいた。あるとき、旅人が歩いてっていると、向こうから男がやってきた。旅人は渴いた男に水を分けてやり、食べ物を分けてやった。旅人の水と食べ物、なくなった。

また、別の道で、オレオの商人が倒れているのに出くわした。旅人は介抱してやり、すぐに町の宿へ連れて行った。旅人の路銀は、なくなつた。

また、別の道で、川を渡れずにいる少年を見つけた。旅人は、少年を背負い、川を通らせてやり、濡れた服のかわりとなるよう、上着を渡した。ついに、旅人は着物すら、なくなった。

しかし、旅人は満たされた。

「オレオっていうのは、お金持ちが多かったせいで、当時、嫌われていた種族です。つまり、旅人は意地悪せずに、助けてあげたわけですね」

ふんふん、とわりと真面目に聞いている猟奇殺人鬼たち。

「さて、最後に満たされた、とありますけど、これはどういうことだと思いますか？」

グランが、自分のおなかを撫でる。

「いい気分になったってことじゃないの？」

「そうですね。おなかがいっぱいになった時みたいに、気分がよくなったってことでしょうか。ふたりとも合ってますよ」

褒められて、えへへ、と顔を見合わせるグランとティーン。

「イッパイ アゲチャウ ナンニモ ナイ」

ペーズリーは、ウーンと首を傾げた。

「タスケル イッパイ？」

「ああ、なんにも持ってないのに、どうして気分がよくなるのですか？」

ペーズリーが、うんうんと頷く。

「難しい質問ですね……なら、逆に自分に置き換えてみましょうか。気分がよくなるかどうかはともかく、みんなだったら、困っている人に、何をしてあげますか？」

「ナンデモ イイ？」

「なーんでもいいですよ。何に困ってるかも考えてみてくださいね」  
ペーズリーが、一生懸命考え出した隣で、全く考える気のない男がいた。

「何をするか、ねえ……相手が女性なら、喜ぶことなんて、すぐ分かるんだが」

ジルの指先が、さりげなくキオの手をたどる。キオは、しばらく張り付いたような笑顔のままだったが、ふいに反対の手をぐっと握り締めた。

パアアアアアアアアアア

ンン！！！

どさり、と声もたてず、ジルがテーブルに突っ伏す。心なしか、焦げ臭い。

え、なに、これ夢？

「……キ、キオ、それは一体」

アイリーンの言葉に、キオは手元のスイッチを掲げ、足元にある機械を示して見せた。

「教育的指導補助機械1号のプラズマショック君です。15歳以上の方にとって、不適切発言かつ不適切な行動をとった場合などに、この機械から、みなさんが座っている座布団に、電気ショックが送られます」

「……はい？」

「座布団ってというのは、その薄っぺらいクッションのことです」

「いや、そつちじゃなくて……電気ショック……?」

「電気のショックです」

「分かってるわよ、んなことは」

「電気の衝撃です」

「別に日本語訳してくれなんて言っていないわよ!そうじゃなくて!なんで、そんな危険な装置持つてるの!？」

キオは、聖典に挟んでいた手紙を、ひらひらと振った。

「ゼペット司祭様が、なにかに役立てなさいって、送ってくださいました。司祭様のすることに間違いはありません。きっと、みなさんを指導するのにスゴイ効果を発揮してくれますよ」

と、とんでもないもの送ってくれたな、司祭……!!

青ざめる5人（一人は気絶中）に、キオはにこやかに微笑んだ。

「やだなあ、みなさん猟奇殺人鬼でしょう?これくらい、大丈夫ですよ」

「もう、すでに大丈夫じゃない人が、横たわってるんだけど……」

それに、猟奇殺人鬼は、あくまで猟奇的な殺人を犯した人間というだけで、そんな怪物的な存在というわけでは……。

不安げな様子を見て、キオは慌てて手を振る。

「そんなに心配しないでくださいよ！さっきのジルの言動はダメでしたけど、教育的指導には三段階ありますから」

三段階？

「あまり適切でなかった発言の場合は『注意』程度です。やや適切でなかった場合は『忠告』、全く適切でなかった場合は『警告』となり、不適切2回目で『宣告』、つまりジルみたいになります」

誰もが、倒れたままのジルを見つめ、ごくりと喉をならす。

プスプスと煙をあげる状態になると、そうおっしゃるんですね……。

「ちなみに、『警告』後は、塩水を飲んでもらいます」

まさかの感電率アップ……！？

「これも、みなさんのためを思っていますから！いわば、愛の鞭ですからね！」

拳を握って、熱く語るキオを、アイリーンが制す。

「そんなギャンブルみたいなことしたくな」

「あ、あんまり不用意に立ち上がらないくださいね。まだ使用が不安定なもので、うっかり『宣告』スイッチを押してしまうかもしれません」

立ち上がりかけたアイリーンは、無言で腰を下ろした。

な、なにこの恐怖政治……！！

「さて、じゃあ話を戻しますね。なにかしてあげるっていうのは、難しいかな？質問を変えますね。この話は、一体なにを表したかったのでしょうか？」

「え、ええ〜と……」

こんなに真剣に考え込んだのは、初めてかもしれない。それぞれ、必死に思いを巡らせる。掌が汗ばみ始めた。

「だから、いいことすれば、自分も幸せになるってことでしょ……？」

「あ、いいですね、その答え！聖典の解釈には、はっきりした答えなんてありませんから、デイーンの答え、十分100点満点です！」

他にないかないですか？とキオに目で促され、リジーが肩をすくめる。

「ようは、人してもらいたいことを、自分も進んで行え、つてことだよ。そうすれば、見返りを求めずにいるも、自然と善行による心の財産が、積まれていく。財産は、人間関係だったり、愛情だったり、様々だろうけど」

リジーの答えに、キオは感動で、声を詰まらせた。

「すごい！リジー、そこまで読み込めるなんて……僕、心からの拍手を送りたいです！！」

リジーは、満更でもない顔だ。しかし、調子に乗るのは、彼女の悪いところ。

「いや、でも、まあ、心の財産ってのは、旅人の自己満足のことだろうけどね」

パアアアアアアアアアア

ンン！！！！

「リジーイイイイイイ！」

そのまま黙ってりゃいいものを、余計なことを！！

「そういう言葉を使うのは、どうかと思いますよ、リジー」

「……はい、すみません」

不死身と呼び声も高いリジー・ドットは、『忠告』レベルでは倒れない。でも、お尻が痛かったのか、ちよつと涙ぐんでいる。

「人によいことをしたから、自分も気分がよくなった。それを、自己満足というと、なんというか、馬鹿にするというか、客観的ぶつて蔑んでいる様に聞こえます。少なくとも、喉が渴いてる人を助けたことは、自分だけの独りよがりじゃないです。人様にそういうこと言っちゃいけません」

「ごもつともです」

快樂殺人者の代名詞であり、故国では童謡にまでなった凶悪犯罪者、殺人鬼フリークの間で熱狂的な人気を誇っている「赤頭巾」は、教会ネズミ相手にあっさり陥落した。

青の女神信者って、みんなあんなっちゃうのかしら……

今更ながら、宗教の恐ろしさを思い出すアイリーン。

「じゃあ、あとは、この紙に、感想書いてくださいね。本当はもっと話し合った方がいいんですけど、そろそろ夕飯の支度しなくちゃ」  
キオが配る小さな紙には、爆発した果物のようなものが描かれている。

「なに、このイラスト？オレンジ？」

「それ、ゼペット司祭様の似顔絵です」

それは、別に、なんの他意もないイラストだった。

キオは絵が下手だから。

しかし、そのことを、まだ知らない5人は恐怖に震え上がった。

『宣告』レベルは、こうなるんだ……………」と。

【本日のキオに対する好感度】

リジー - 2 (あの小僧、許さん)

ディーン - 1 (怖すぎる)

ペーズリー - 1 (イツモノ キオ チガウ)

ジル + 1 (あれ？ひょっとして照れてる?)

アイリーン - 1 (好感度とか、もうそっつう問題じゃないわ)

グラン + 0 (びりびりしなくて、よかった)

## 第1楽章 朝の風景

10月26日(日)

みんなの扱いが徐々に分かってきた。

『キオの青春サヨウナラ日記』より

「おはようございます」

快活に挨拶するキオを、アイリーンが眩しそうに見る。

「元気ねえ」

言いつつ、大きな欠伸をひとつ。

眠たげながらも、常に一番乗りで、キッチンを覗くのは彼女である。

次に、ペーズリーが、ペタペタ降りてくる。当初は起こしにいつても、暖かい寝床を離れなかったが、今は自分で起きてくる。多分、夕飯が早いいため、おなががすいて目が覚めるのだろう。

そうこうしていると、リジーやディーンが、グランを交え、なにやら騒ぎながら、キッチンにやってくる。アイリーンのようにコーヒーの準備をするためでなく、朝ごはんのメニューをチェックするためである。

起床のラストを飾るのは、十中八九ジルだ。

「リジー、デイン、悪いんですけど、ジルを起こしてきてもらえませんか？ちよっと手が離せなくて」

ジルを起こすのはキオにとって少々危険なので、適任の危険人物にお願いする。2人は、わーい、今日はどうやって起こそう、などと言いながら、寝室に駆けていく。

しばらくすると、ジルの悲鳴が聞こえてくる。

何をされたのかは、想像しないのが1番。

朝食のほとんどは、キオが作る。

働き者の修道士は、朝の5時に起きているため、殺人鬼たちがもそもそと起きてきて、朝ごはんを食べる頃には、昨日の洗濯物は中庭に干されているし、簡単な掃除も終わり、空気の入れ替えもすすんでいる。

食堂のテーブルの上は、適当に切ったパンを中心に、ボイルした鶏肉と生野菜のサラダ、玉ねぎのスープ、卵、ソーセージ、ふかしジヤガイモ、季節の果物などがぎっしり並ぶ。

朝は一日の大事な源。不規則極まりない生活の猟奇殺人鬼たちも、ようやくキオと同等の生活スタイルを築きつつある。

「天にまします我らの父よ、毎日の糧を今日もお与えくださり、感謝します」

食前食後のお祈りは、絶対やらない殺人鬼たち。しかし、最近は、キオが祈り終わるまで、食べないよう気をつけている様子だ。

猟奇殺人鬼の観察を欠かさないキオは、最近、食事時の配膳や配置にも気を配っている。

例えば、パンの食べ方。

アイリーンはバターで、ジルはプレーン。リジーは蜂蜜のことが多い、ペーズリーはパンに卵やハムなど、色々挟むのが好きだ。グランは、ストロベリージャムを使うことが多い。ディーンは気分によつてだが、パンを千切つて丸めて食べるなど、遊び半分のことがしょっちゅう。(もちろんキオに注意される)

みんな寝起きということもあつて、大抵は、問題なく進む。

しかし、稀にみんなが無駄に元気だったとき、もしくは極端に機嫌が悪かつたときなどは、いけない。こういう場合は、ちょっとしたこと、猟奇殺人鬼モードに入るので、キオは、すみやかにテーブルの下へ潜る。

「それよこせ」

「ヤダ」

リジーとディーンが、気に入りの惣菜をめぐつて、睨み合っている。

なにやら、不穏な雰囲気……キオが止められる、レベル2を超えている。

彼は、食べかけのパンにサラダの残りを挟み、早々にテーブル下へ避難した。

「この前、ゆで卵あげたじゃん！よこせ！」

「そのかわり、デザートのパディングあげたじゃん！」

「キャラメルソースだけじゃん！」

「あそこが一番おいしいんじゃない！」

ガリガリガリと、フォークの突き刺さったチーズポテトウィンナーが、皿の上を行ったり来たり。

カシャン！

鋭く突き出されたナイフを、フォークが素早く受け止める。目に留まらない速さで、銀色の刃が飛んだ。リジーの大鎌が、ディーンの手を弾くが、それより先にディーンはその場から消えていた。もちろん、チーズポテトウィンナーもない。

「いただきまー」

「そうはいくか！」

空いた皿が、次々とディーンを追うが、なかなか当たらないのだから。縦横無尽で陶器製品の割れる音が舞っている。しかし、そちらに気をとられていたディーンの手が、手から滑り落ちた。

「「あ！」」

それに、二人が手を伸ばし

「おい、いい加減にしごふあ」

ジル、リタイア。

「バカバカ！ちゃんと持つてろよ！」

「リジーが横から、あんなことするから落っこちたんじゃん！もう！」

落としたんだ……後で、キチンと叱っておかないと。

騒がしい席に苛立ちがピークに達したのか、アイリーンがテーブルを叩く。

「暴れるなっつてんでしょーが！この　ども！　野郎！」

爽やかな朝にも関わらず、放送禁止用語だつて飛び出す。

そうこうしているうちに、別の惣菜争奪戦に移ったようだ。

もう、それが食べたいというよりは、ほとんど意地だろう。しかし、  
どうやら、そのおかずを狙っているのは、ディーンとリジーだけで  
はなかったようで……。

「しまった……！」

「……身体が、動かない」

リジーとディーンが、低い声で呟く。

オイオイ！なにか技が飛び出したの！？

「にゃーん」

ペーズリー！？ペーズリーが、なにか新技を出したの！？

気になったキオが、そろりとテーブル下を移動し、ペーズリーを見  
ようとすると。

「ひよわああああ！？」

突然、大鉦おおなたが厚い檜かじのテーブルを突き破ってきた。

どう刺激したんだろう……眠れる獅子のグラン参戦。

ガシャーンとかバリーンとか、途端に派手な音が激しくなる。

「アイリーン・ネルソン、あの子の借りを返させてもらおうか」

リジーが完全に本気。あの子きって、どのときよ。

「やれやれ、お前とはやりあいたくないんだがな、グラン」

わりと早い段階で、リタイアしていたジルが復活したのか、参戦。

「同じ手は、もつくわないもんねーだ！」

ディーンは、対ペーズリーか。さて、どこから止めればいいんだろう。

キオは、テーブルの下で、パンをかじりながら、嵐が収まるのを待った。

殺し合いが本気で面白くなりだしたら困るが、今はまだ冗談半分のはずだ。

「あらあら、それで、互角のつもり？」 「お手柔らかに願いたいん

だがね」 「原型を留めないほど切り刻んでくれる！」 「ミエテナイ

バカ」 「見えてないんじゃないもん！」

「ううおおおおあああああああ！……！」

なんか、もう筆舌に尽くしがたい騒音。

しばらく好き勝手に暴れさせて、少しお互いに疲れが見え始めた頃に、キオは目覚まし時計をセットする。それは、最新式のもので、目覚ましベルのかわりに音声を吹き込むことができる。

設定時間を、現時刻にセットし、テーブルにそつと置く。

カチッ

音声か、再生される。

『おはようございます、選んで』

「「「「女神いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
ッ！！！！！！！！！」」

猟奇殺人鬼たちの怒りは一瞬ヒートアップするものの、大抵これで見んな我に返る。

女神の存在で、自分の状況を思い出すのである。

その後は、片付け。

いつも誰かがチョツカイをかけがてら、手伝ってくれる。大暴れしたときは、食堂の掃除もやらなくてはならない。これは、暴れた連中に任せる。

今日も怪我人ひとりなく、一日を始められた。

後片付けの終わったキオは、大きく伸びをする。

これが、修道士と猟奇殺人鬼の、朝の日常風景である。

## 第1楽章 夜の風景

10月27日(月)

コミュニケーションは大事だ。

相手を知るために、必要不可欠。

『キオの青春サユウナラ日記』より

「ありえない」

アイリーンが、つぶやいた。

「……昨日は、子守唄を歌われたわ」

隣でデイーンが、コーヒーに山盛り砂糖を入れている。

「オイラ、結構楽しかったよ？絵本いっぱい読んでもらった」

ジルは、しきりに、もうちょっとだったのに、と呟いている。何がもうちょっとだったのかは、聞かなくても分かるため、誰も尋ねない。

「発狂しそつだよ……これで4日目か」

リジーは豪快に紅茶をかき回し、味わいもせず一気飲み。

なんの話か。キオが、つい最近始めた「おやすみの挨拶」についてである。

今日一日どういうことをしたか、それは楽しかったのか、など小学生の子供に親が聞くようなことを延々聞かれ、眠れない場合は子守唄に突入する場合もある、危険な新習慣だ。

特に、アイリーンが気に入らないのは、「額にキス」。

これでは、完全に子供扱いである。

最初はアイリーンが、大人の女として余裕を見せていたのに、キオは一旦頭を切り替えると非常にストイックで、天然だ。

「どうにかペースを取り戻したいわ!」

ぐぐつと拳を握るアイリーン。

無断で縄張りに侵入してきた相手を威嚇するのは、当然である。相手が、敵意を示してくれば、それだけこっちの士気もあがる。だが、相手があまりにも害がなく、悪意もない子ネズミだからこそ、みんな、どう追っ払っていいものやら悩んでいるのだ。

みんな、そんなに気に入らないなら、「来ないで」って言えば、キオは来ないと思うけど。

そうは思ったディーンだが、あえて言わずにおいた。

「次コレ」

「ディーン、これで5冊目ですよ？そろそろ、寝ないと」

「だって、眠くないんだもん」

まだ10時だし。

その夜も、やはりディーンは眠くなかった。

そもそも、今までは昼間眠って、夜起きていたのだから、そう簡単にリズムは直らない。

際限なく絵本を出すディーンを、キオは優しくたしなめる。

「そろそろ、みんなの様子も見てこないといけないし………ね？」

しかし、ディーンは、引き下がらない。他の5人が「挨拶」を不満に思っているのだから、その自分といってくれればいいと考えているのだ。

「まだ、いてよう！」

つんつんと服をひっぱるディーン。

多分、ディーンの方がキオよりも年上なはずである。しかし、その仕草が、キオの父性愛というか、保護欲というか、そういう類のものをビシバシ刺激する。それで、ついつい、立ち上がる腰が重くなるキオである。

「じゃあ、もう一冊だけ」

しかし、その頃、他の5人は気が気ではなかった。時間には厳しいキオが、10時過ぎても部屋に来ないのは、おかしい。

無論、ただ待っているだけの彼らではない。

夜の闇に乗り、それぞれ動き出していた。

キオは、目をこすりながら、自室へと戻っていた。

あのあと、ディーンに30分以上絵本を読まされてしまい、すっかりキオの方が眠くなってしまった。みんなの部屋に挨拶に行こうかとも思ったが、さすがに眠ってしまっているだろう。キオは遠慮す

ることにした。

「ところで、いつまでついてくるの、ディーン？」

キオの後ろには、枕を抱えたディーンが、ついてきている。

「今日は、キオと一緒に寝る！」

満面の笑顔を浮かべるディーン。

彼だってイイ大人のはず。それに、ひとりだけ甘やかすのは、不公平だ。

さすがに断ろうとすると、その気配を感じたのが、ディーンが持っていた枕に顔を埋めた。

「……だって、窓がガタガタいって、一人怖いんだもん」

くっそう、僕の父性愛め。僕の保護欲め。

「……もう、遊ばないで寝るんですよ？」

「うんー！」

非情になりきれないキオは、あっさり承諾。思うツボである。

電気をつけていない室内は暗いが、暗いままで寝るのが苦手なディーンのために、テーブルランプだけつけてやる。

キオは、ディーンの枕を並べてやり、ぼんぼんと叩いた。

「約束どおり、おとなしく眠ってくださいね」

「うん、分かった!」

「それじゃあ、眠れるように、とっておきのピロートークを」

待て。

「なんで、ジルがいるんですか!?!」

ジルは、別段悪びれもせず、白い歯をきらめかせ微笑んだ。(念のため記載しておくが、服は着ている)

「キオが、なかなか来ないから、途中で遭難したんじゃないかと思つて、様子を見に来たんだ」

ベッドがやけに暖かい。結構長い間、ここにいたのでは。

いろいろ勘繰りたくなるキオ。

しかし、問い詰める前に、新たな敵が出現した。

「ふっふっふ、それで、出し抜いたつもりか、青髭」

声に顔を上げると、天井に張り付いた何者かが、高笑いをしている。

「うわあ〜……ヤモリみたいなのがいるよ、キオ」

ディーンに引かれてるよ、リジー。

「……なにやってるんですか？」

「キオが来ないから、途中で死んでるんじゃないかと思って、様子を見に来てあげたんじゃん！感謝しろい！」

何故、威張る。

リジーは、天井から降り立った。

「みんなで、パジャマパーティーか？ぜひとも混ぜてもらおう！」

白地に赤いイチゴ模様が踊る、可愛いパジャマで、胸を張るリジー。どうやら、騒ぎに混ざりたいだけのようだ。

すると、キオの部屋の扉が、ノックされた。

「キオ、いるの？」

アイリーンだ。扉を開けた彼女は、盛大に眉をひそめる。

「なんだ、いるんじゃないの！」

アイリーンのネグリジェの裾を、しゃがんだペーズリーが握り締め

ている。ちなみに、アイリーン、元々全裸で寝ていたが、キオの強い薦めによりネグリジェの着用が、義務付けられた。

「アイリーンとペーズリーは、なんでここに？」

「キオが来ないから、途中でジルに拉致か、リジーに惨殺されたんじゃないかと思って見に来てやったんじゃないの！」

事例が、具体的すぎる。

「みんな、キオと一緒に寝たいの？」

デイーンの何気ない言葉に、アイリーンが眉を吊り上げる。

「違うわよ！そんな」

「私は寝たいよ」

「死ね！！」

理不尽にキレられるジル。

「じゃあ、グランの部屋行こうよ！一番ベッドが大きいし！」

「グラン、そこにいるよ」

リジーが指差した先、部屋の片隅に、大きな影が立っている。

「え？あれは、クローゼットで」

リジーが部屋の明かりをつけると、大きな大きなグランが浮かび上がった。

……ええ、怖ッ！？……いえ、すいません……グランだったんですね……

本気でクローゼットだと思っていた、キオ。

「ねえ、グラン！グランのベッド使っていい？」

使う気満々のリジーが問うと、グランは頷いた。頷かざるを得ない状況を、きちんと汲み取る賢いグランである。早速、各々の枕を抱え、グランの部屋に移動することになった。もちろん、キオも同行させられている。

グランの部屋は、意外にも綺麗に片付けられており驚いた。というか、これが普通のベッドの状態なのだ。新聞紙やら綿やらを敷き詰めたペーズリーのベッドや、お菓子の袋がそこらじゅうから出てくるディーンズのベッドや、枕元に凶器を並べられたリジーのベッドのほうが一番普通ではないのだ。

「なんか、修学旅行みたい！」

「じゃあ、怖い話しなくちゃ」

「あと好きな子の話も！」

すっかり旅行気分の6人は、グランのために特別に購入したキングサイズのベッドで、好き勝手に転がり始めた。全力で前転するリジーに、ペーズリーが轢かれてる。

「なに言ってるんですか。夜更かしはダメですよ。もう寝ます」

キオのセリフに、一斉にブーイングが飛ぶ。

「えーいいじゃん、センセー」

「誰が先生ですか」

「ひどーい！きびしーい！」

「厳しくないです！もう消灯時間は過ぎてるんだから、寝ます！」

リジーとデイーンのセリフにつられ、ちょっとノってきているキオ。

「もうちょっとだけーあと10分だけー」

「センセ ジップン チョウダイ」

ジルとペーズリーまで。

「……しょうがないですね……じゃあ、10分だけ」

結局は折れるキオである。

なにはともあれ、修道士と猟奇殺人鬼の夜は、こうして更けていく。

翌日、ベッドで思い思いに休む彼らを、例の女神ボイスが叩き起こ

すじじいになる。

## 第1楽章 夜の風景（後書き）

いずれ、学園モノやっちゃいたいです。

多分、本編4楽章の制服事件あたりで差し込むことになるでしょう。

主人公は、明るさが取り柄、ちよっぴりドジな女学生 リジー。（  
大鎌込み）

気になる転校生 キオ。

顔を合わせると、すぐケンカになっちゃう幼馴染 デイーン。

寡黙だけど優しい、リジーと同じ図書委員 グラン。

成績優秀、生徒会長 ペーズリー。

カッコいいんだけど、謎が多い保健室の先生 ジル。

キオを巡って恋敵になっちゃった元親友 アイリーン。

諸悪の根源とも言うべき女校長 シアン。（女神様）

ごめんなさい。調子こきました。

星マークは……魔が差して、つい付けてしまったんです。初犯です。

## 番外編について

前回の話までで、交響曲でいう第1楽章部分は終了です。次からは、第2楽章フランチャコルタ編に入ります。

ですが、その前に、番外編をやらせて頂こうと思っております。楽章ごとにしよーもない番外編を入れてしまおう！と端から企んでいたからです。

ところで、多分、変奏曲を読んでくださっている読者様は、交響曲も読んでくださっているのではないかな、と思っております。なので、番外編に関しては本編に関係なく、(本来なら第4楽章に出てくる)ギルシア国家憲兵隊とかも書きたいんでございます。書いてもよろしいでしょうか。ウズウズ。

というわけで、今後の変奏曲予定。

とある読者様から、お許しがした「猟奇学園物語」。

「猟奇学園物語」の詳細は、前回後書きにて。

次に、24日の日曜日(つまり今日)に、たまたま早く起きて見た、特撮モノに影響され生まれた「ケンペーレンジャー」。詳細は以下に記載。(ブログから持ってきました)

あと、「もし『猟奇殺人鬼の交響曲』がドラマだったら『NG編』とか。

とりあえず、最初の番外編は、「猟奇学園物語」でいきます。

楽章ごとに、こういうのが入りますので、ネタをお持ちのお客様は、三月までご一報くださいませ。

ぶつちやけた話、しょうもなければ、しょうもないほどいいです。

いわゆるセルフパロディでございますので、「現代モノだったらどうよ!？」とか「パロディの王道は家族モノだろ!」とか、なんでもかまいません。

変奏曲ですので、三月の勝手(というか暴走)は、どうかご容赦くださいませ。

本編もキチンと書きますので!

交響曲第5楽章を書きあげてから、更新しようと思っております。

### 【ギルシア戦隊ケンペーレンジャー】

普段はギルシア国家憲兵隊だけど、軍章の不思議な力でケンペーレンジャーに変身!

燃える闘魂 ケンペーレッド・スコール。

冷静沈着 ケンペーブルー・フェンリル。

大佐大好き ケンペーイエロー・レト。

目立たない眼鏡 ケンペーグリーン・ハティ。

もう帰りたい ケンペーブラック・マーナガラム。

ジェボードンは、秘密司令室の司令官とか、そんなんです。

敵は、世界征服を企む、純真な暗黒大帝キオと、その配下の將軍たち。

暴食と誘惑の魔女 灰かぶり。

冷酷な黒薔薇の騎士 青髭。

猜疑心と偽りの指揮者 笛吹き男。

破壊を司る真紅の小悪魔 赤頭巾。

死と再生の冒読者 長靴を履いた猫。

グランは、怪物です。あの、ビルとか潰す大きい奴です（扱いがひどい）

なんか、もう……やりたい放題ですね。交響曲との兼ね合いもあるので、この話は、できるだけ、第4楽章後の番外編に持って来ようと思います。

番外編について（後書き）

やっちまったなあっていう自覚はあるんです……ええ……どうか、  
生暖かい目で見守ってやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5434d/>

---

猟奇殺人鬼の変奏曲

2009年11月9日04時21分発行